

長短解	借物ノ弁	妖物ノ論	四季草花ノ辞	薊	燕子花	菊	水仙	出代の弁	平泉	馬提灯	狸治行	宇治行	春雨弁	雨月賦	蜂の巢の説	犬をいたむ辞	枕ノ賦	三猿箴
六	六	六	六	六	六	六	六	七	七	七	七	七	七	六	六	六	六	六
玉芝	玉芝	玉芝	玉芝	玉芝	玉芝	玉芝	玉芝	蝶局	蓼太	蕪村	蕪村	蕪村	楊良	暁台	蝶夢	蝶夢	梅丸	成美

我春集	おらが春	みちのくの旅	蛙の野送	添乳	露の世	豆太鼓頌	憎鳥辞	心の箴
六	六	六	六	六	六	六	六	六
一茶	一茶	一茶	一茶	一茶	一茶	一茶	一茶	一茶
一茶	一茶	一茶	一茶	一茶	一茶	一茶	一茶	一茶

わらひ草

立圃

立圃 野々口氏、名は親重。文祿四年(二五七)京都に生まれた。雛人形細工を業としたので雛屋とも称した。又別号を松翁ともいう。貞門派初期の俳人として活躍し、撰集『誹諧発句帳』(二六三)、発句集『空磔』(二六五)、文集『六日の菖蒲』がある。寛文九年(二六五)七十五歳没。本文は『空磔』と『立圃文集』に収めてある。

うぶの神—うぶすながみ(産土神)の略、生まれた土地の守護神。
 ○えびす三郎—夷三郎、恵比須、七福神の二で商家にまつる神、一説に事代主神ともいう。「硫黄が島の鸞岳といふところへえびす三郎殿といふ神有、岩殿と名付たり。」(類船集)
 ○猿は—影に「猿の尻笑い」
 ○烽火を見て一周の幽王の妃は容易に笑わず、事もないのに王が烽火をあけて諸侯を集めたのを見て初めて笑ったという故事。
 ○一枝の花を—釈迦が靈鷲山で説法の際、蓮華一枝をつまんで弟子に示した。弟子のうちただひとり迦葉尊者のみが微笑したという故事、拈華微笑。
 ○細ぶし—なわの結び目、太古文字のなかつた時、細の結び目で互に意志を通じたという事。
 ○世は皆—「举世皆濁、我独清、衆人皆醉、我独醒」(漁父辞)に倣った文。

わらひ草の種は誰が世にか時きて今までははびこるらん。うぶの神の愛し給ふ時笑ふといへば、神代よりやはじまりけん。さてはえびす三郎殿こそもつ根ざしなるらめ。それよりしてにつこと笑ひ、くつくと笑ひ、にが笑ひ、そら笑ひ、高笑ひと成りて尽きせぬ物は笑ひなるべし。かく書き付くるを見ても笑ふ人あるべし。よしよし諸鳥はふくろふをわらひ、猿はさきへ行くしりをわらひ、烽火を見て笑ふもあり。又一枝の花を笑ひ給ふもあり。非情の草木も花の多みをふくみ、細ぶしだにも笑ふとなれば、世は皆わらへり。我のみくすみて益なしと思ふ物から、ひとりわらひして口にまかせ筆にまかす。

声なくて花や木ずゑの高わらひ

山の井

季吟

季吟 北村氏、名は久助、別号拾穂軒、寛永二年(一六二五)近江祇王村に出生、医を業としが早く京に上り松永貞徳に入門、国学を修め俳諧を学んだ。著書多く、俳諧撰集『新統犬筑波集』(二六七) 古典注釈『源氏物語湖月抄』俳論作法書『山の井』『独琴』(二六九)『埋木』が著名。

○山の井 正保五年(一六四八)刊、大本五冊、四季の詞を集め解説したもの。文はすべて実作の心得を旨としたものであるが、俳文の嚆矢ともいふべきもの。

残雪

帷子雪の村消えを、めゆひのかのこまだらと見たて、餅雪の残れるを、日の鼠のかぶりさしといひたて、山姫の化粧もとろはげ、山姥の額縮もたぐられけんなどもいひなし、又野の雪にめに見えぬ鬼瓦も化をあらはし、つくる雪仏は、涅槃をもまたてはてにけりともいへり。猶しふる空にむかひては、霞の衣の中いれのわたとも見なし、

○帷子雪—薄くふりつもった雪。
山姫はかたびら雪をかつきかな 貞徳(犬子集)
○めゆひのかのこまだら—めゆひは鹿子の絞り目。時しらぬ山は富士のねいつとてもかのこまだらに雪のふるらん(伊勢物語)
○日の鼠—日・月を黒白のねずみにたとえる仏典の故事による。
○山姥の額縮—額帽子。
○化をあらはし—雪消てばけあらはずや鬼瓦 常俊
○雪仏は—雪仏、雪で固めて作った仏像、涅槃は釈迦入滅の日。陰曆二月十五日。諺に「雪のはては涅槃」(毛吹草)一月十五日以後は雪はふらない。きさらぎをまたでな消えそ雪仏(犬子集)

はるさめにまじるはなかいらぎなどもいひなす。
ゆきつくす江南の春の光り哉。長頭丸
春の水は、日足にけやぶられ、風の手につきながさるゝ心ばへ、又とくるとも、隙などもいへり。

蛙

ふれくとなきて雨をこふといへば、天蟾といふといへど、むぎわらの屋に世を捨ててすむ尼にもとりなし、露の玉をかづきの蟻にもいひかけ、猶なはしるに引きこもり、井のうち気にて、でんどをしらぬ心をもし侍る。又水にすむかはづの歌よむといふ事は、ふみにも見えしに、をのが口からへびにものまれて命をかるんじ、いくさなどをもすといふれば、文武二道のかはづかなともきこえ侍りし。

三月尽

春のくれには、数寄屋のいろりも、ねまのこたつもふたぎつゝ、てがひのねこのより所なげにきて、ねうくとうちなくさへ、をのづから春したひ顔にきこゆる心ばへ、

○はなかいらぎ—梅華皮、粒状の硬い凸起のある餃類の皮、刀剣の鞘のかざりにするもの。
○ゆきつくす—「行尽江南数十程、曉風残月入華清」(杜常)によつた句。
○長頭丸—松永貞徳
○日足に—薄氷を踏むはるの日足かな(犬子集)
○風の手—風の手や氷のひまの水なぶり(玉海集)

○天蟾—小形の蛙、四肢の各指端に吸盤をもち樹上に登る。体は緑色または灰色、季は夏。麦わらの家してやらん雨蛙 智月
○露の玉—露の玉をかつきあぐるやあま蛙(犬子集)
○でんど田土か。「し侍る」は俳諧に作る意。
○ふみにも「古今集」の序文。
○いくさにも「古今著聞集」卷二十「高陽院南大路蝦合戦事」に見える。
○文武二道—歌軍文武二道の蟾かな(正章千句)

○三月尽—弥生尽、三月の晦日のこと。
○春の果、春のかざりともいふ。
○数寄屋—茶室。